カトリック高松教区報

2007年7月8日（第118号）
発行所 カトリック高松司教区 広報委員会
〒760-0074 高松市桜町1-8-9
TEL 087-831-6659 FAX 087-833-1484
Email
教区:tkcuria@mxi.netwave.or.jp
広報:tk-koho@mxi.netwave.or.jp
生涯養成:yosei@takamatsu.catholic.ne.jp
http://www.takamatsu.catholic.ne.jp/

協力宣教司牧とは

司祭、信徒が一緒になって「神の民」を作り上げていくこと

高松教区報にも、その他の司教の文書にも何度も載せられて、説明もされていることばが「協力宣教司牧」態勢です。それでも要領がつかめないのがこのことばかもしれません。それはこのシステムが新しいからというより、実際に実行しながら理解し、納得していく種類のものだからです。

高松教区ではは や「協力宣教司牧」は始まっています。広い地域や、離れた地域では必ずしもそれが実現できるわけではありません。しかし、基本的見方はどこにあっても変わりません。すなわち司祭、信徒が一緒になって「神の民」を作り上げていくことにあります。宣教も司牧もある特定の人達だけが自分の考える通りにするものではありません。知恵を出し合って、力を合わせて行動するのです。これを共同体と呼びます。

「神の民」というと抽象的に聞こえますが、実際は小教区の中で司祭、信徒が共に考える組織がつくられています。高松教区ではまず教区単位で「宣教司牧評議会」をたちあげました。現在は各県別に地区の「宣教司牧評議会規約」作成に向けて、はや最後の段階にきています。それから各小教区の「宣教司牧評議会規約」を作成する方向に向けていきます。これらは司祭、信徒が一緒になって働くための土台となるからです。規約に沿って、目標に向かってともに歩むことを目指しています。これらと関係なく独自の活動をするのではなく、中に入ってその中で一緒に活動を行うのです。

ともかく高松教区ははやこの方向で歩み始めています。試行錯誤をするでしょうが、行っているうちに多くの知恵がついてきます。それを希望して、一緒にどんな教区を、どんな小教区をつくりあげたいかを考えることとしましょう。

５月２０日三本松ルルド祭にて

高松教区長　溝部　脩

主な記事

2～3面	委員会報告
3面	医療のともしび
4～6面	各地区便り
7面	トーマス・マヘル神父金祝
8面	お知らせコーナー

はばたき

聖書の中で最も感動的な場面の一つは受胎告知のくだりであろう。天使の言葉に心乱れながらもマリアは答える。「わたしは主のはしためです。お言葉のとおりになりますように」。その瞬間に長い旧約時代は終わり、待望の新約時代が始まった。▼幼子にとって何より安心できる処は母の懐である。すべてを委ねた幼子の安らかな寝顔は安堵感に満ち、幸せそのものである。母はわが子とともに喜び、ともに泣く。母は身を挺してわが子を守る。母の愛は限りがない。▼聖母マリアは神の母であり、また私たち人類の母でもある。母であるからこそ神と私たちの間をとりなして下さる。「生活に疲れたとき、罪の意識に悩むとき、マリア様、ご保護のもとに身を委ねます。いつどこでも私たちの祈りを聞き入れ、御助けをもって導いてください。やがて死を迎えるその時も、ともにいて守り支えてください。」

聖母被昇天祭がもう近い。

委員会報告

成功させよう、徳島シンポ！
～教区民の日に代えて～

司祭評議会
教区宣教司牧評議会
教区事務局長　西川康廣

１　教区の高齢司祭のための家について話し合った。幾つかの原案が出たが、該当者の意見を尊重しながら今後の計画を進めていくことで合意した。

２　九月一五日（土）徳島シンポジウムの骨格が固まる。

タイトルは、「足利将軍・阿波公方の末裔　殉教者ディオゴ結城了雪神父の生涯」で、会場には徳島県郷土文化会館が決まる。これは教区民の日に代わるものであるが、従来の在り方と異なり、徳島市長・阿南市長を含む徳島県民を巻き込むシンポジウム形式で開催する。

パネリストに、川村信三師（上智大学准教授）「浄土真宗の講とキリシタン時代の組について」、結城了悟師（長崎二六聖人記念館元館長）「結城了雪の霊性」、坂東英雄氏（徳島県城東高校教諭）「徳島文書と結城了雪」を招き、溝部司教が司会を務める。間で宮崎中世音楽研究会による、天正（一六世紀）音楽の披露がある。

この徳島大会のために以下の取り組みをする。大会経費約二〇〇万円の予算が見込まれるが、意識高揚を兼ね特別献金を呼び掛ける。溝部司教による四県巡回講座を開く。

３　愛媛と高知で地区宣教司牧評議会規約の成案が、協力宣教司牧の枠組みで固まり、次回司祭評議会で審議・決定をお願いする。

殉教者を想い、共に生きる一年を充実させるために

生涯養成委員会
Srメリー・ギリス

二〇〇七年四月から始まった新年度は生涯養成委員会にとって「殉教者を想い、共に生きる一年」になります。列福式という大きな出来事は全世界の教会にとって恵みの時ですが、特に日本の教会の私たちにとって「教会」の意味を再認識する大切な時になるでしょう。委員会では徳島の方々と共に徳島生まれの「殉教者ディオゴ結城了雪神父」の列福をお祝いする行事の準備に取り組んでいます。教区の多くの方が共につどい、お祝いできることを心から願っております。また教区の今年度の目標である「宣教」を意識し、教会以外の方々にも、殉教者が持った強い信仰と信念を是非伝えたいという思いで行事の企画を考えています。

委員会の報告

１「殉教者ディオゴ結城了雪神父シンポジウム」実行委員会

・　委員＝シルバー神父、松永神父、桑原稔美氏、高田芙美氏、竹嶋芳明氏、西川助祭、Srギリス

・　行事の詳細＝ポスターのとおり

・　ポスターのデザイン＝鳴門ベニウス絵画会（協力＝野口写真館）

・　従来「教区民の集い」でお願いしていた「特別献金」を前もって（七月八日、八月一五日、九月二日の三回）集めることになりました。

２「殉教者の霊性」講演会

溝部司教は、殉教者についての講演や研修会・黙想会の指導のために日本各地に呼ばれています。四国の各地区の皆様にもその話を聴く機会を企画し、講演の目的である「日本教会の活性化と現代社会にメッセージを送ることにある」ことを教区民として共有できたらと思い、各地区の責任者に依頼しました。松山地区はすでに六月二四日（日）に決まりました。

３　講座「カトリック教会の教え」

昨年の香川地区に続いて、一〇月から愛媛地区、一月から徳島地区が講座を開きました。愛媛地区は約九〇名、徳島は四五名の受講者でした。終了後取ったアンケートの主だった感想を報告します

・　講座をうけて、祈り、信仰生活、自分自身の生き方を振り返る良い機会になり、信徒としての生活の支えとなった。

・　これからも定期的にこのような勉強をする機会がほしい。

・　信仰を持っていない方を誘うのに、まず自分自身の生き方と教会共同体の迎え方が大切ではないか。

・　未洗者が親しみやすい講座を企画する。たとえば「人間の助け」となるようなもの、音楽など。

・　メディア、特にインターネットを利用して、たくさんの人に

伝える。

三つの地区のアンケートを読んだ感想ですが、信仰生活をより深いものにしたいという希望を強く感じました。その深さこそは宣教への活力に繋がっていくのではないでしょうか。

「殉教者ってどんな人？」創作劇などを通し学ぶ

江の口教会　宮本匡士

教区子ども＆高校生の集いが四月二八日（土）～二九日（日）、高知県芸西村の家にて開催された。「殉教者ってどんな人？」をテーマに小学生三〇名、中学生一五名、高校生七名、大人四五名の合計約一〇〇名が集まった。新しく青少年担当となった佐藤直樹神父の「自己紹介ビンゴ」「ワオ！イエス」により九つの班が作られた。

全員サッカー、陸上協公認四〇〇ｍ走、レストランのカレーの後「列福される一八八殉教者のうち子どもや信徒の生きざま」と題して司教のお話があり、主課題の劇つくりに突入した。

九名の劇監督が事前に準備されており（各県二名）讃岐のアントニオ石原孫右衛門、阿波のディオゴ結城了雪、土佐のパウロ田中、妻マリア、北条の八右衛門のほか中浦ジュリアン、米沢の殉教者、コルベ神父の劇が小中学生の意見を入れたり、着物やスータンの小道具を用い、即興的オリジナルに完成していく。その間、テゼの祈りや昭和期の白黒映画二六聖人をテーマにした「我世に勝てり」を体験した。

創作劇熱演

ごミサの中で班毎に発表し（制限時間一〇分がＣＭなしの一五分となり）大いに盛り上がった。参加者全員大人も子どもも区別なくはじめて殉教者等の役を演じ、生涯、記憶に残ることと思われる。

医療のともしび（4）
～尊厳死へ向けて　死への準備が必要？～

カトリック信者は、キリストの生涯を思い起こし、復活を信じます。死を恐れないのが前提です。しかし所詮人間は弱いものです。自分の体に死が近づくという時、どういう状況におかれるのか、精神的または肉体的に耐えられるのか、正直　私は不安です。いつかはくるものだと人間としてまた医師としてわかっているにもかかわらずです。

まだ信仰心が弱いと批判されるかもしれません。教会の教えに従うことが大切なことはもちろんです。

一方で医学は発達し、呼吸が止まっても人工呼吸器で生存できるようになりました。しかし進歩と同時に、苦悩も生み出しました。まず医療費がかかります。全てを入れると１ヶ月に７０－１００万円位が必要になります。（これに保険の割合の実費負担となり、また高額療養制度もあり、実質的にはそれほど必要にはなりません）そして回復をしないで長期に亘るとき、装置をとってほしいと家族から希望がでることがあります。装着時には医師から装置の説明を受けても家族は動揺しています。あとから冷静になり、こんなことは予想してなかったと思い直すようです。しかし現実問題として、一度装着すると外せない。外すことは死です。外す操作をする場合、当然本人の意思確認はできません。家族が最終判断をしなくてはならないのです。家族の意思をうけ、人工呼吸器を取り外した医師が逮捕される例まででてきました。医療行為ではなく、殺人になる見解のようです。

医学の進歩は本来喜ぶべきものですが、患者　家族　医療関係者を苦しめることにもなりました。これを受けて、ちまたでは遺言を元気なうちに書くということが密かなブームとなっています。書店で冊子として販売されています。人工呼吸器をつけるかどうか、本人の意思を示しておくことも含まれています。私も親に１冊購入しました。

日本尊厳死協会の活動も紹介します。「尊厳死の宣言書」（リビングウィル）を医師に生前に示そうというものです。①不治かつ末期になった場合、無意味な延命処置を拒否する②苦痛を最大限和らげる治療をしてほしい③植物状態に陥ったとき、生命維持装置をとりやめてほしい、この上記３点を示す活動です。

本人の意思が明確になれば家族、医療従事者も悩まずにすむと思います。

坂出聖マルチン病院　整形外科医　田賀谷健一

各地区だより

二〇〇人が集い マリア様への賛美が響く
第23回ルルド祭を祝って

三本松教会　笹瀬孝夫

主の昇天の日、今年も溝部司教様を迎えて三本松教会でルルド祭が行われました。

新緑の美しさに加え、主任司祭・信徒の努力によって庭一面が美しい花壇に覆われていました。

例年通り一二時半からロザリオの祈りが行われました。今年は西川新助祭に先唱をお願いし、力強いお声に従って会場一杯にマリア様への賛美が響きました。

溝部司教様の説教は、人の子であるイエズス・キリストの母であるマリア様の尊厳について、女性の地位を汚さない表現とその日本語への翻訳についての含蓄の或るお話でした。当日は、桜町教会からの六〇名余、一一の小教区、神の母マリア修道院、神学院、阪本病院の患者さん達と二〇〇名近くの参加がありました。今年も昨年に続き、大分、福岡をはじめ四国各県から参加下さった一四名の神父様方に、心から感謝しています。しかし、天気が良すぎて、風もあまり無く、神父様の所はテントを張っていなかったので、暑くて申し訳なかったと思っています。テントを張るとどうしても暗くなるのでと、ネルソン主任司祭の迷われた上の選択でしたが・・・・。

五月二〇日は田中英吉司教様が神様のみもとに帰られた日、田中司教様がかつてブラジルから持ち帰り蒔かれた一粒のフェニックスが大きく育ち、祭壇の後ろに一層頼もしく見えました。

当教会のルルドは、三三年前ドミニコ会神の母マリア修道院のシスターたちと力を合わせて作ったのが始まりでした。初めは、小教区だけで祝っていましたが、段々規模が大きくなり、ルルドの洞も広くなって、現在の形になってから二二年経ちました。私も三五年前、妻と二人だけで聖地ルルドを訪れた時の感動は今でも忘れることは出来ません。一〇年前にも桜町教会の信徒有志が下田神父様を団長としてルルドを訪れ、ルルド内の小聖堂でミサに与かったことを懐かしく思っています。

ミサ後親睦会に移り、恒例の手作り讃岐うどんを味わいながら懇談し、楽しいひとときを過ごすことが出来ました。普段は三〇人にも満たない小さな教会に、前日から多くの人が準備を手伝って下さり、この日は二〇〇人近い信者が集まって語り合えるのはやはりマリア様のお陰だと感じています。

手打ちさぬきうどんを囲んで

紛争の絶えない現代の世の中で、一日も早く平和が実現するように祈っておられるマリア様の取次ぎによって、私たちも高松教区の今年の目標である【宣教】に真剣に取り組みたいと決心しています。

今年のルルド祭も無事に終えることが出来ました事を、この場を借りて皆様に心からお礼申し上げます。

男女共に助け合い支えあう 新しい関係の構築を
教会と現代社会の女性問題

徳島教会　酒井ツギ子

一九六二～六五年に開催された第Ⅱヴァティカン公会議は、現代社会の中の教会の刷新がその目的であった。それから遅れること一〇年の一九七五年に国連は第一回国連婦人会議をメキシコで開催し、その後十年を国連婦人の十年と定めて、世界の女性の地位向上のための具体的施策を求めた。これを契機に、世界の女性の地位や人権が回復してきたばかりではなく、女性の生き方は急速に変化してきた。それはまさしくパラダイムの大転換ともいえるものかもしれない。そして私はもし、公会議がこの「婦人の十年」の後に開催されたならばどうであったかと考えたりする。

さて、「女性とはどうあるべきか」という考え方は、それぞれの国の歴史、文化、伝統によって固有の価値観や期待感が形成されてきた。たとえばわが国では、長い江戸時代を通じて、貝原益軒の『女大学』の教えを徹底的に教え込み、女は男に劣るもの、女性は家事に徹し、己の女のおろかさをわきまえ、従順に生きること、といった教育が津々浦々まで浸透するよう、相撲の番付け表として家々に張られたり、書道のお手本として使われたりして、庶民に行き渡り、二一世紀の現在でも、「おんな・子供の出る幕ではない」「男子厨房にいるべからず」というような伝統がさまざまな形で現代の女性差別に潜在的な影を落としている。

ところで、教会と女性という観

点から女性問題を考えて見るとどうであろうか。カトリック教会は聖書を通してイエス様の御教えとマリア様の模範にその霊性を学んでいる。そして、御子を慈しみ、お育てになった御母マリア様と夫ヨセフ様の生き方は、暖かい家庭のあり方を具体的に私達にお示しくださり、マリア様とヨセフ様の支えあう共生の姿はクリスチャンファミリーとしての私達の生き方のモデルともなっている。

だが他方、教会における女性の立場はこれとは関係なく、その国の古い伝統的・文化的な習慣、風習の方が支配的で、行事におけるご飯炊き、トイレ掃除その他、さまざまな点で、男女は不平等な固定的役割の中に何の疑問も持たずに取り残されて来ているのが現状であるといっても過言ではない。日本の社会自体が変わり切れないでいる現実を反映していると言うことかもしれない。

われわれに課された課題は男女共に助け合い支えあう新しい関係の構築を、教会という家庭の中にも実現していくべきではないだろうか。冒頭第Ⅱヴァティカン公会議に言及したのはその意味からである。すなわち、教会は二一世紀の社会で、新しい価値観や教育を受けた若者達にも、魅力ある、新しい共同体、新しい家族的連帯感に結ばれた教会として、そのあり方についてわれわれにどう生きるべきかを問うているのではないかと考える。そして、われわれはより適切なあり方を知るために、更に深く聖書を研究する必要があるが、それと共に、現代社会の現状と変革にも知的関心を向ける必要がある。

恵まれない子供たちに救いの手を

「ミンダナオ子供図書館」支援

鳴門教会　福田健一

当教会は昨年秋の第二回司牧評議会において「ミンダナオ子供図書館」の支援を、二〇〇七年度の活動目標の一つに掲げました。

「ミンダナオ子供図書館」とは、松居友（とも）さんを代表者とする現地法人のＮＧＯで、恵まれない子供たちに救いの手を差し伸べる福祉団体です。会員は、戦闘難民だったイスラム教徒、開発で山に追われた先住民、カトリックとプロテスタントの孤児や極貧家庭の若者たちで、共に祈り生活し、教育や医療から見放された地域に入って、読み聞かせ活動、医療活動、スカラシップ（奨学金）活動など行っています。

彼らが望んでいる支援物資は、衣類、かばん、食器、靴、学用品、絵本、医薬品などですが、それらは貧困家庭から来た苦学生や病気の子供たち及びその付き添いの親たちのため、または貧困地域や緊急支援用として活用されています。

さる五月二七日、聖母幼稚園の父兄と当教会の信徒たちから集められた支援物資の整理と荷造り作業を行いました。荷物は一一個のダンボール箱（容量一八五リットル）が一杯になりました。作業する人たちの充実感に満ちた顔を見ながら、ふと私は第二次大戦後の苦しい時代にアメリカからの支援物資に助けられた子供の頃を想い出しました。人は苦境の時に助けていただくことほど有難くうれしいことはありません。

支援物資を荷造りする信徒たち

どうか私たちのささやかな志がミンダナオの子供たちのところに届きますように！

「ペトロ岐部と１８７殉教者」の列福

日本のカトリック教会がかねてから念願としていました「ペトロ岐部と一八七殉教者」の列福が二〇〇七年六月一日一四時（日本時間二一時）、教皇ベネディクト十六世の裁可で正式に決定いたしました。

この決定は日本の教会内外に殉教者の存在と列福の意味を知らせる貴重な機会でもあり、列福式そのものがはじめて日本で行なわれることを考えるとその影響が大きいと思われます。

列福式の開催場所・開催日等については、未定で今後はバチカンの国務省、列聖省、日本カトリック司教協議会で協議の上決定されますが、今回の列福の教皇裁可から日を置かず、しかも十分な準備期間を確保することを考えた提案を、日本側案として提出することになります。すでに日本の教会では近い将来の列福決定を見据えて、殉教者列福調査特別委員会（委員長・溝部脩高松司教）が中心となり準備しています。

今後、さらに具体的なことは、列福式実行委員会が主催者である日本カトリック司教協議会と密接に連携をとりながら準備していくことになります。

カトリック中央協議会ホームページにおいては、「ペトロ岐部と一八七殉教者」を特集として取り上げ、様々な角度から殉教者を紹介していますのでご参考下さい。また逐次、準備状況決定事項を配信いたしますので、ご覧下さりご利用くださいますようお願いいたします。

（カトリック中央協議会ホームページより転載）

http://www.cbcj.catholic.jp/jpn/index.htm

故上妻久惠名誉理事長 お別れの会
～聖カタリナ学園学母を偲んで～

平成一九年六月九日（土）、シスター・ローサ上妻久惠先生のお別れの会が、学校法人聖カタリナ学園主宰により松山市北条の聖カタリナ大学で約三五〇名の参列者を迎え開催されました。

ロビー展

上妻先生は去る一月二六日に一〇一歳の生涯をもって聖ドミニコ宣教修道女として神への奉献生活を全うされました。

聖カタリナ学園の歴史はその創立の始めから、ロザリオ管区の男子ドミニコ会から多大の恩恵を受けてきました。当時の地区長ファン・カルボ神父様は松山の地に女子教育の必要性を考え学校を設立し、一九二四年にその管理運営を聖ドミニコ宣教修道女会に委託されたのです。

これを受けて、上妻先生は戦中戦後の混乱期の中、一九四二年（昭和一七年）から一九八九年（平成元年）まで永年にわたり聖カタリナ学園の理事長として学校運営の重責を担い、カトリック学校教育の発展のためにひたすら献身し、愛媛県、京都府、愛知県に、大学、短期大学、三高等学校、五つの幼稚園の創設を通して、その時代の要請に応えながら学園の歴史の中に真の福音宣教者としての足跡を残してこられました。また、現職を退いた後も常に母としての祈りをもって静かに学園を支えておられました。

この度のお別れの会により、上妻先生のご功績を振り返り、また真の教育者としてのお姿に触れることができ、学校関係者や沢山の教え子はこの偉大な学母に改めて敬意を表すると共に、感謝の念を新たにいたしました。

この日のお別れの会は、聖カタリナ大学ホビノ・サンミゲル学長による追悼ミサに始まり、上妻先生の霊魂の上に神の無限の憐れみを祈り、在りし日の姿を偲び、先生の愛唱歌を合唱して閉会しました。

追悼ミサ

五月二七日、仙台から京百合子さんが番町教会を訪れ、ミサ後、腹話術で聖霊降臨について話してくれました。子供も大人も楽しい一時を過ごしました。

投稿コーナー

「いじめ」に思う

桜町教会　田井貞良

いじめはどうして起こるのであろうか。学校の先生方やその筋のプロがいじめる側の卑劣さを説いても、いじめられる側の深刻さを訴えても、自殺者が出ても、無くならない。

私は、その原因の一つは「お笑い芸人の芸」にあるのではないか？と考えた。専門家からは即座に否定されるかも知れないがあえて論を張って見たい。

近年の漫才は、一人が場違いなことを言うと、相方が馬鹿な！とか言って相手の頭を叩く。するとそこに笑いが生じる。最近の売れっ子タレントはオーベーカと言って叩くのが人気である。私は叩いて笑いを引き出すやり方は昔から嫌いである。古典落語や古典漫才のように、叩かずに笑いが取れないものか？

子どもたちはこの叩き、叩かれる関係から起こる面白さを真似する。叩かれる方は叩く方より弱い子のようだ。チャンバラ遊びでも昔から斬られる方は弱い子であった。真似だけであれば、ある時は攻守逆にして遊べば良いものだがそうはならない。叩かれ役はずっと叩かれ役である。こういう遊びから上下関係の地位に発展してしまうのではないか。

鶏のつつき、つつかれる関係〈順位性〉はひどいもので、最下位のにわとりは餌を得られないばかりか、つつかれて尻から腸がはみ出て死んでしまう場合さえある。いじめはこんな単純なものではないと思うが、一理はあるのではないか？

それに、誰でもいじめる要素を持っていると言われるが、私も、叩きお笑いを見ていて、笑っている自分を発見する。

このコーナーは、テーマ「いじめ」に関して皆様からのご意見を受けるコーナーです。今までに二回の投稿がありましたが、今年中（後三回）は「いじめ」のテーマを続けますので、投稿をお待ちします。なお、一二一号（来年一月号）からのテーマを募集します。ご意見をお寄せ下さい。

トーマス・マベル神父様金祝おめでとう

すべて良し、すべて感謝

中村教会主任司祭　トーマス・マベル

「神を愛する者達、つまり、ご計画に従って召された者達には、万事が益となるように共に働くという事を、私達は知っています。」ローマ８：２８

始めに、この世に生を受けて、この７５年間に出会い導いてくださった方々に感謝いたします。やはり、まず最初に親愛なる家族である父と母、また女兄弟であるパトリシアとジュディー、そして男兄弟であるジャックとビルに感謝したいと思います。

その他にも数多くの方々と出会い導いて頂きました。その方々の名をすべてあげて感謝したいところですが、それは難しいことですので、ここでは人生の岐路に出会い、私を今の場所に導いてくださった３人の方々について感謝の心を込めて述べさせていただきます。

まず、１人目はシスター・フランシスコ・ヨセフです。

私は１９３１年５月２９日に双子の兄としてシカゴで生まれました。私の兄弟は皆「平和のマリア様学校」に通っていました。その学校の先生はドミニコ修道院のシスターであり、７年生のとき私の担任となられたシスター・フランシスコ・ヨセフもそうでした。シスターは午後の授業が終わったあとの僅かな時間を使って、私達に外国で活動した宣教師（神父）達の話を読み聞かせてくれました。私はその話に感動を覚え、自分もそうでありたいと思いました。それが私の召し出しの種（神父になる動機）となったのです、

その後、父に宣教師になるための学校に進学したいと言ったとき、父は冗談のように「そうすれば、いつも屋根と食事３回はあるけれど、お金持ちにはなれないよ。」と言いました。

確かに父の言う通りお金持ちにはなれませんでしたが、いつも自然豊かな美しいところで暮らせたことで、心に豊かな恵みを頂きました。

故郷はシカゴのミシガン湖の近くにあり、ダウンタウンに行く道は湖畔の道（南岸のドライブウェイ）でしたし、修練の時はミシシッピー川の川沿いの小高い土手に暮らしていました。また、カナダのバトルフォードには地の果てまで続いているかのような小麦畑があり、収穫の季節にその穂が風に揺れると、まるで黄金色の大河を見ているかのように幻想的でした、ミシシッピー州のパスクリスチャンでは哲学と神学を５年間学んだのですが、そこもまた、メキシコ湾の中の小さく入り組んだ湾のそばに学校があり、大自然を満喫することが出来ました。

そして今、日本最後の清流と言われている四万十川と太平洋のそばで暮らている私は、大自然の中で暮らせたこと、自然の恵みに感謝しています。’

さて、２人目はオブレート会（聖母献身会）の初代管区長ギル神父です。ギル神父との出会いは、私がまだアメリカの神学校で学んでいる時でした。日本から私の学校に講演に来られたのです、その時のギル神父のお話は、私の心を．日本に向けさせるのに十分なほど魅力的なものでした。

私が日本に来たいと思ったのはこの時です。そしてその願いは１９５７年に神父となってから僅か１年後の１９５８年に総長から日本行きの辞令を受けることでかなう事となりました。その年の９月のことでした。

私は日本に来てから、兵庫県・福岡県・東京都と回りましたが、高知県に一番長くいます。その中でも高知市の中島町教会が一番長く、その間に県立西高校で２３年間、国立高専でも１６年間英語を教えました。

また、１９７２年からは高知刑務所で教誨師・篤志面接員（英会話・断酒指導）を社会奉仕として続けてきました。そのために、幾度か表彰されたことがあります。その中でも、皇居まで行き、天皇陛下のお言葉を頂いた藍綬褒章は記憶に残っています。

さて、最後の方は「ゲストハウス」の創設者オースチン・リプリー氏です。リプリー氏は、アルコール中毒が病気と認められておらず、中毒死が当り前であった１９５６年に、ある司教たちの反対にもかかわらず、デトロイトの枢機卿ムニー大司教の協力により、神父達の為のアルコール中毒療養所として「ゲストハウス」を設立されました。そこで、AA-Alcoholics Anonymous（無名のアルコール依存症からの自助回復プログラムグループ）という１２ステップからなるシステムを使用し、数多くの神父たちをアルコール依存症から回復させました。

私も１９７６年にこの「ゲストハウス」に入り、アルコール依存症を克服し、飲酒を止めてもう３０年になります。神に感謝。

以上のように、この５０年間、いろいろな体験をしてきましたが、今、振り返ってみれば、冒頭の聖書の引用である「ローマ人の手紙８章２８節」の意味するところである、「すべて良し、すべて感謝」と言うのが、現在の心境です。

最後に、私の好きな言葉を書かせていただきます。

神様、私をあなたの平和の道具としてお使いください。
憎しみのあるところに愛を
　　いさかいのあるところに許しを
分裂のあるところに一致を
　　疑惑のあるところに信仰を
誤りのあるところに真理を
　　絶望のあるところに希望を
闇に光を
　　悲しみのあるところに喜びをもたらすものとしてください
慰められるよりは慰めることを
　　理解されるよりは理解することを
愛されるよりは愛することを
　　私が求めますように
私たちは与えるから受け
　　許すから許され
自分を捨てて死に
　　永遠の命を頂くのですから

追伸　私の誕生日は５月２９日です。この手紙が届く前に、私は７６歳になっています。

（御本人から投稿していただきました。）

お知らせコーナー

映画「NAGASAKI 1945 アンゼラスの鐘」in 伊予市上映会のお知らせ

昨年、高松市で鑑賞して深い感銘を受けました。ぜひ私たちの町の方々にも観て頂きたいと考え、下記の要領のように企画し、上映会を予定しています。
お近くの方のご参観と皆様のご協力をお願いいたします。

記

上映日時
７月１４日(土)
①10時開場　上映10:30～12:00
②13時30分開場　上映14:00～15:30

場所
伊予市市民会館

主催
「NAGASAKI 1945 アンゼラスの鐘」
松山･伊予上映実行委員会

連絡先
天使幼稚園　松本　TEL 089-982-0311
カトリック郡中教会　今泉洋子
TEL 089-982-2089
なお、入場料等については
連絡先へお問合せください。

平和旬間2007

８月６日（月）～８月１５日（水）

「喜ぶ人と共に喜び、
泣く人と共に泣きなさい」
ローマ12:15

平和の使徒になるために

プログラム

１．祈りのリレー
日時：８月６日（月）～１５日（水）

２．基調講演
日時：８月１１日（土）13:30～17:00
場所：四国カトリック会館
講師：ＮＧＯ「地に平和」太田道子師

３．平和を祈るミサ
日時：８月１２日（日）11:00～
場所：桜町カトリック教会（司教座聖堂）
主司式：溝部脩司教

主催
カトリック高松教区
人権を考える委員会

主な司教日程

７月１日（日）　小豆島教会
３日（火）　司祭評議会
４日（水）～６日（金）
修道会初期養成研修会（軽井沢）
８日（日）　お告げのマリア会総会
10日（火）～13（金）
ローマ国務長官、列聖省訪問
17日（火）　大阪管区代表者会議
22日（日）　高知地区研修会

８月５日（日）　広島平和巡礼
９日（木）　サレジオ黙想会（福岡）
12日（日）　平和旬間ミサ（桜町）
13日（月）　歌って踊って平和を語る（徳島）
19日（日）　阪本病院落成式
23日（木）　長崎カトリック幼稚園研修会（長崎）
24日（金）～25日（土）
カテキスタ研修会（東京）
27日（月）～30日（木）
教区司祭黙想会

編集後記

今号より、前広報委員長和泉文男が辞任し、その後任として田井貞良が就任しました。その結果、委員の仕事の分担を組み直し、広報の紙の発行日も第二日曜日にせざるを得なくなりました。悪しからずご了承下さい。
なお、原稿の募集と、編集アイデアのご意見をお寄せ下さい。

投稿記事募集

【テーマ】
いじめなど少年を取りまく事件・事故

【投稿要領】
字数は３００字以内（写真歓迎）
「所属教会名、住所、氏名」明記のこと。
中傷・誹謗はご遠慮下さい。
原稿はできるだけメールで送って下さい。
写真もデジカメで撮影したものはメールで送って下さい。

【投稿先】
メール：tk-koho@mxi.netwave.or.jp
郵　便：〒760-0074
高松市桜町１丁目８－９
カトリック高松司教区広報担当
ＴＥＬ：087-831-6659
ＦＡＸ：087-833-1484